億7100万円（同28・6

上し、47億2300万円の当期純損失（前期109億4600万円の当期純利益）となった。

《セグメント別概況》

【連結】　単位：百万円

事業の種類	前期	構成比	当期	構成比	増減	増減率
家庭品事業	230,398		231,109		△711	△0.3%
薬品事業	32,162		31,575		587	1.9%
食品事業	—		6,640		△6,640	—
化学品事業	33,108		31,619		1,488	4.7%
その他の事業	13,844		7,601		6,243	82.1%
売上高合計	309,514		308,545		968	0.3%

科目	前期	売上比	当期	売上比	増減	増減率
営業利益	6,021	2.0%	9,865	3.2%	△3,843	△39.0%
経常利益	8,271	2.7%	11,270	3.7%	△2,999	△26.6%
当期純利益	△4,723	△1.5%	10,946	3.5%	△15,670	—

「家庭品事業」は、事業環境は厳しい状況にあったが独自性のある新製品の導入や積極的なマーケティング投資を行い、重点ブランドの育成に努めた結果、売上高は、2303億9800万円（前期比0・3%減）となった。また、営業利益は、トータルコストダウンを進めたが新

家庭品事業主要分野の状況は以下の通り。

◎オーラルケア事業分野

歯磨は、「デンターシステマ」「プライムステインオフ」「ムシ歯リスクをケアするクリニカ」を新発売、歯ブラシはかためタイプを追加発売した「デンターシステマ」シリーズが堅調に推移する中、「ピトイーンMini」「クリニカハブラシ」を新発売した。口中剤は、「ムシ歯リスクをケアするクリニカデンタルリンス」を新発売。以上の結果、当事業分野の売上げは453億5800万円（同2・8%増）となった。

◎ビューティケア事業分野

シャンプー、リンスは「植物物語」や「ソフトイ

キレイキレイシリーズは「キレイキレイ薬用泡ハンドソープ」を新発売し前期の売上げを大幅に上回り、制汗剤は「パンパウダースプレー」を新発売し前期比微増の売上げとなった。以上の結果、当事業分野の売上高は351億900万円（同16・7%減）となった。

◎ハウスホールド事業

洗濯用洗剤が、「トップ」、「部屋干しトップ」が消費者の愛顧を得る中、「ブルーダイヤ」を改良発売し前期の売上げをかなり上回った。漂白剤も「スーパー手間なしブライト」を改良発売するとともに、「手間なしブライト」が順調に推移し、売上げは前期をかなり上回った。柔軟剤は「ディフレッシュソフラ

調理用関連品は、「リード」シリーズで「新鮮保存パック」、「冷凍保存パック」を改良発売したが、主力のキッチンペーパーで競争激化の影響を受け、全体としては前期を下回る売上げとなった。

以上の結果、同事業分野の売上高は、1499億8000万円（同3・5%増）となった。なお、海外については、全体としては前期をかなり上回る売上げとなった。

「薬品事業」は、独自技術を活用した高付加価値・難型創造型の新製品を積極的に導入し、売上高は321億6200万円（同1・9%増）となり、営業利益は一トータルコストダウンを推進したが、新製品や主力

ジレットジャパンインクは、電動歯ブラシのリーディングブランド「ブラウンオーラルB」の新製品として、3次元音波振動（上下＋反転）式歯ブラシ「ブラウンオーラルBプロフェッショナルケア8000」を1月31日から新発売した。

「ブラウンオーラルB」は、信頼できる医療技術評価機関「コクラン共同計画」により、高い評価を受けている電動歯ブラシ。同機関は、「ブラウンオーラルB」について、「上下＋反転運動タイプが、電動歯ブラシ

ブラウンオーラルB
プロフェッショナルケア8000

の中で最も歯垢除去力が高く、歯肉炎、歯石、ステイン（着色汚れ）に対し効果的で、手磨き同様安全である」と説明している。

また、同社では、「近年、電動歯ブラシの使用者は、全ての年代で増加しており、歯周病・虫歯予防だけでなく、歯を白くしたい、口臭を防ぎたいなどの目的が多様化している。また、歯茎の弱い人など、口腔内の状況によって、個々のニーズも年々向上している」としており、今回発売する「ブラウンオーラルBプロフェッショナルケア8000」は、こうした個々の細かい要望に対応するための最新

環境事業などの支援業務、化学原料の研究・製造・販売などを行う環境経営研究所（横浜市港北区、横山彰社長）は2月3日、東京都港区の明治記念館で「急成長する美白市場の動向と新商品開発秘話」と題したセミナーを開催し、同社が開発に参加した新美白成分「安定型除放性ハイドロキノン（以下SHQ—1）」の概要を発表した。

会では、はじめに横山社長があいさつに立ち「平成13年の薬事法改正でハイドロキノンを市販化粧品に配合することが認められたこ

とを受け、経産省が主導する地域即効性コンソーシアム事業として、にいがた産業創造機構の後援のもと、新潟薬科大、東京工業大、当社開発部門の産官学共同による同成分の安定性・安全性向上を目指した研究が始まり、昨年“安定型除放性ハイドロキノン（SHQ—1）”が誕生した」と同成分の開発背景を紹介するとともに「同成分の工業化・事業化については、プロジェクト参加者の中で唯一の民間企業である当社が担当することになった。今後、当社では化粧品メーカーの

様々なニーズに対応するためにも、より良い製品作りに尽力していく」と抱負を述べた。

続いて、にいがた産業創造機構・黒川玲ディレクターが「最新の化粧品業界における新商品開発とマーケティング分析」をテーマに講演を行った後、同成分の開発に携わった環境経営研究所・古島健技術統括部長が「ハイドロキノンを用いた新規美白製品の開発研究について」を題した講演で、SHQ—1を別記の通り紹介。

その後、黒川氏、古島氏、

環境経営研究所

新美白成分を発表

ハイドロキノンと界面活性剤を融合

社団青配会津田沼ヒフ科・牧野百合子医師の3名によるパネルディスカッション

が開かれ、SHQ—1に対する医療および化粧品業界からの期待感や今後の方向性などについて様々な議論が交わされた。

◎古島氏講演（要旨）

平成13年の薬事法改正以降、数社が美白成分「ハイドロキノン」配合の化粧品を発売したが、皮膚への刺激や環境による変質などで、使用者から多数のクレームが寄せられた。

同成分の研究を行う「ハイドロキノンを用いた新規美白製品の開発」プロジェクトでは、同成分の安定性・安全性の向上を目指した研究に取り組み、東京工業大・大橋教授ならびに新潟薬科大・飯村氏による研究成果「界面活性剤との結晶化を利用した芳香族化合物の気化速度を調節する方法」を応用し、ハイドロキノンと“界面活性剤”を分子レベルで結合することで①気化を制御②酸素・光に対して安定——などを実現した新美白成分「安定型除放性ハイドロキノン（SHQ—1）」の製品化に成功。

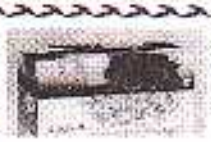
さらにSHQ—1の安定性および安全性試験を実施したところ、従来のハイドロキノンから安全・安定性が劇的に向上したことを確認するとともに、水溶状態、耐熱性、DHなどの製品化に深く関連する項目でも好結果を得られた。

SHQ—1を化粧品に配合する方法としては①オイルに分散して使用②カルボキシビニルポリマー増粘剤との混合は避ける③酸化防止剤の混入は有効④pHは5・0～6・0程度⑤加熱は80℃以下——などを推奨しているほか、現在、①水相分散型②さらに微細形状に③界面活性剤の低濃度化——なども実現する「SHQ—2」の研究も進めている。

大王製紙から、エリエ誕生25周年を、“花”開いている

今回は、して、①「イシュー企コパック」ルローシ（20組増量）ウルトラガ増量）④「れパンツ」価格品）を「第3回エスプレイコ「風の妖精」を実施する

「風の妖ン」は、エシュー5個を対象にし企画で、景250名にーアレンジら希望するまたWチャ



記念企画品

ブラシの「プナルホワイト」の着色汚れを然な白い歯にか、口臭予防